

楽しみのためのスポーツ 初代会長・織田幹雄さんの手記

春が深くなる卯月。1日のエープリルフールで始まった4月。花見の季節であり、春暖に思わず気も緩みがち。シーズンに向けて気持ちを引き締めよう。3月26日にポーランドで開幕した世界室内マスターズ選手権は4月2日に幕を閉じた。前回の室内大邱(テグ)大会は金27、銀26、銅18の計71個のメダルを獲得した日本。果たして今回は――。成績は次号に譲り、今月号も先達の思い出とマスターズ陸上のいわれを掲載。

連合初代会長、織田幹雄さん 「スポーツは楽しみだった!」

1928年アムステルダム五輪の三段跳で15m21を跳んで日本人初の五輪金メダリストとなり、1931年には15m58の世界新記録を出して“陸上界の神様”と謳われた日本マスターズ陸上競技連合初代会長(1980～93年)の織田幹雄さん。1998年に93歳で亡くなるまでマスターズ陸上に思いを寄せていた織田さんが、会報8号(1988年)に幼いころの思い出を寄稿されている。

この陸上界の神様といわれた織田さんの幼少期から旧制・中学生のころはどうだったのか。会報をお持ちでない会員の皆さんに転載させていただいた。織田さんは2011年3月に創設されたマスターズ陸上殿堂へ。

寄稿文(原文)は以下の通り。

◇

小学生時代から走ることは得意の一つだったが、身体が貧弱で長距離は苦手だった。

それでも勝ちたいと夜道を走ったり、校庭をぐるぐる回っていた。

その努力が役立つ中学に進むと、毎週一回(冬は二回)の長距離(約2000m)競走が全校生徒を四つのチームに分け、学年ごとの争いとして行われ、この競走ではいつもトップ争い

をしていた。

中学一年の時、流行性感冒で中止となり、二年の時は、広島宮島間の競走が行われ、一、二年組で優勝したが、先発の上級生を次々と抜いて走ったのは、実に楽しかった。運動会では障害競走などにも出て、ノートなど賞品をもらえて楽しかった。

中学に入るとサッカー選手が一年全員にボールの蹴り方を教え、その中から何人か残して練習させたが私もその一人で、冬の柔道の寒稽古の代わりにサッカー練習だった。

柔道は他の者と違って、利手、利足が左だったから業がよく利いて、クラスの副将にもなって、クラス対抗に出た。サッカーは両足が利くので、フルバックになったり、スピードがあったので、フォワードの左ウイングもやらせられた。

卒業式でもらった柔道の免状は七級となっていたので、直ぐ破ってしまっただが、サッカーや陸上競技に熱心で、柔道に力をいれなかったのが、柔道教師に、きらわれたらしい。

夏休みの水泳練習から、助手もつとめるようになった。

五年生の時はボートも漕いだ。クラス対抗の野球やテニスにも加わったが、何でも楽しくて夢中でやっていた。

陸上競技に専心したのは四年生からだが、それまで色々やっていたのが役立ったのか、直ぐに進歩して、練習中走高跳の日本記録が破れた。

しかし、競技会は緊張して失敗した。長距離は止めて短距離に移り、走幅跳を練習した。

五年生ではさらに三段跳を始め、ハードルも跳び、砲丸、円盤、やりと何でも試みたが、棒高跳は近くの中学との対抗戦に備え一日の練習だけで出たら、相手中学の選手と同記録になった。審判長に跳び方が拙いから二位に決められたが、それでもうれしかった。

パリ大会で外国選手の競技振りを見ていて、走り、跳び、投げる競技に興味を持ち、毎日の練習は五種目ぐらい試みたので、後に十種競技を始めた時から日本記録が破れた。

十種競技は最後の1500mが苦しかったが、その事は直ぐ忘れ、跳躍種目と合わせ十種目も試みながら楽しんでいった。

練習の楽しみよりも競技



▲1988年の第9回全日本マスターズ選手権 M80 砲丸投に出場した織田幹雄会長

会が待ち遠しく感じられた程、陸上競技の虫であった。

自分より大きな選手には勝ってやろうと、闘志を燃やすのも、楽しみの中でした。(原文のまま)

三段跳 10m12の世界新 病から再起した竹中利雄さん(寄稿文)

マスターズ陸上の記事を新聞紙上で知ったのは、私がクモ膜下出血で倒れ、大阪の国立病院に入院中の昭和56年でした。退院後、機会があれば参加したいと思いながら、軽いジョギングを始めるまでに2年余りかかりました。旧制中学時代には陸上競技の選手として活躍したこともあり、2年前から走幅跳、三段跳の練習を始めました。

周りの心配を振り切り大阪マスターズ陸上に加入。大阪記録会に参加、ピットに53年ぶり立った時のうれしさは、何とも言えない感激と興奮を覚えました。そして無我夢中で跳んだのが走幅跳4m29、三段跳9m24でした。

私は当時71歳。関係者から「M70の記録としてはすばらしい記録ですよ」と聞かされ、うれし涙がこぼれました。

第5回沖繩大会(1984年)は腰の故障で出場を断念、治療に専念。昨年の5月には第5回和歌山選手権にオープン参加、大阪の同僚や故郷紀伊田辺の母校の後輩たちから励まされ、1回目の跳躍で10m08を記録、これが世界新記録と聞かされ、我が耳を疑ったものでした。

第6回鳴門大会(1985年)は私にとって、初参加の全国大会でしたが、1回目の跳躍で10m12(+0.9)の世界新記録とアナウンスされ、全身が紅潮するのを覚えました。〔注=3.3mの追い風参考で10m30で1位。2位の森田真積さん(茨城=4月号参照。10m25(+1.5)世界新)〕

最初から世界記録に挑戦する気は全くなく、偉大な森田先輩の記録に少しでも近付きたく練習を徐々にふや

したのと、大阪マスターズの同僚たちが、私の跳躍を温かく見守ってくれ、①助走の時、右手が流れる②ジャンプの際、両手を高くあげて身体全体を引き上げる③着地の際、ヒザが曲がっているなどの適切なアドバイスをいただいたお陰と感謝の気持ちで一杯です。(会報6号=1986年に寄稿・竹中さんは故人。文中数箇所省略)

マスターズって？ 発祥の地は英国

マスターズ陸上って？ 発祥の地はどこ？ 今さらマスターズ陸上のおさらいではないが、ルーツを探るのもムダではないだろう。マスターズ陸上競技連合の鴻池清司会長が理事長(現・専務理事)時代に『世界ベテランズ陸上競技連盟の沿革』の翻訳書を入手し、要点を会報6号(1986年)に掲載したことがある。以下、要点を転載する。



最も早くベテラン競技として組織されたのはイギリスのA・C・ベテランクラブで、1932年に形成され、現在も世界的に強力なクラブの一つである。陸上競技の先進国であり、同国で初めて陸上が行われたのは1825年。ベテランズの歴史はそこまで古くはないが、1949年に男子40歳代の110mHで、ドン・フィンレイ(イギリス)が14秒4で走っている。また、同年代の走高跳でエゴン・ニルソン(スウェーデン)が2m05をクリアしたのが1966年。その2年後にはカーク・フェイン(西ドイツ)が55歳代ハンマー投で53m02のスローイングを見せているが、いずれもかなりの記録である。

既に19世紀の初め、フィリップ王子の提唱で健康維持のために“最良の方法”として熟年男女が始めたのがランニングであり、これらが次第に競技形式となり、ベテランズの発展へと展開していくのである。こうしたことから初期は主にロードランナーだった。

このようなランナーの数が次第に増え出し「年齢別で競技を楽しみたい」という要望にこたえて結成されたのが、世界ベスト・ベテラン長距離ランナー(IGAL)だ。組織結成は1968(昭和43)年で、記念マラソンの国際大会をオランダで開いて祝った。

一方、ロードランナーの活動から独立して、ベテラン競技者がお互いに技術と腕を試すための組織づくりが進められた。

新しい息吹を起こした先進国はニュージーランド、オーストラリア、イギリス、スウェーデン、カナダなど。アメリカの有名なコーチ、ビル・ボアーマン氏が1965年にニュージーランドを訪れた時、70歳以上の人がフィールド競技で活躍している姿を見て、驚くと同時に「この国においてはランニング(陸上)と日常生活が密着している」ことを発見。

帰国後、さっそく国内の組織づくりを行い、デビッド・ペイン氏らの協力です・U・S・マスターズ・トラック・エンド・フィールドチームを形成。40～85歳まで5歳刻みの年齢別国内大会の開催にこぎつけた。この後、ペイン氏は1972年ミュンヘン五輪を見学した際、アメリカと欧州のマスターズ(この時点まではマスターズとベテランズは同意語として認識されていた)が競技することを提案。アメリカ選手団が豪州、カナダのグループとイギリスへ遠征。ロンドンで初の国際ベテランズ陸上競技会を行った。

この競技会がきっかけとなり、第1回世界大会が1975年8月、カナダのトロントで開催され、32カ国が参加した。第2回ゲティパーク(スウェーデン)大会から女性が出場、日本人のミキ・ゴーマン女史(故人)も力走、大会を盛り上げた。この数カ月後、新しく世界ベテランズ陸上競技連盟(W・A・V・A)が発足。男子40歳以上、女子35歳以上の参加資格が確認された。以上が概要だ。